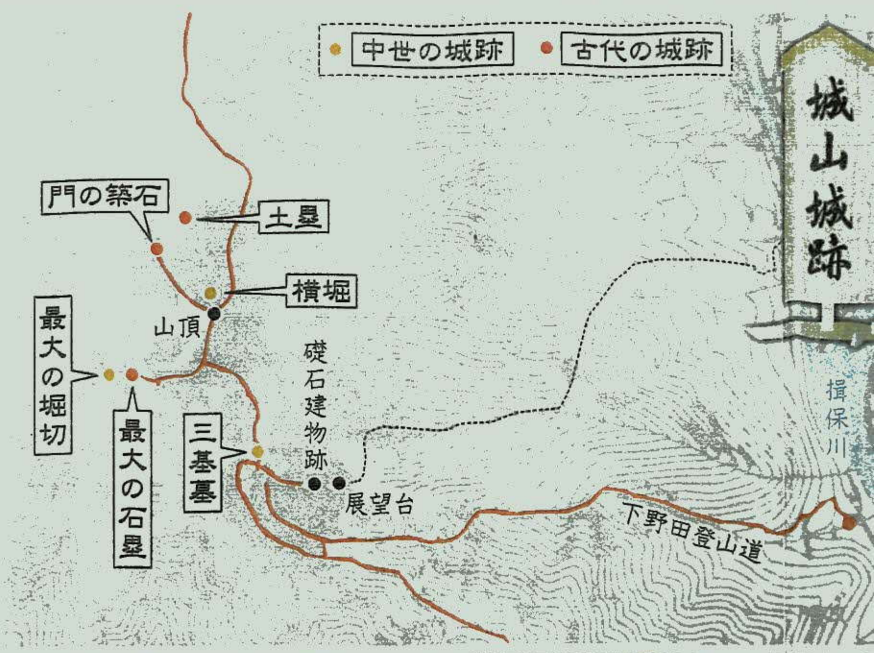

赤松満祐の念持仏と伝わる仏像（たつの・興聖寺蔵）

割ったのだろうか。

中世の城山城は、築城の過程が文献で確認できる希少な遺構だ。満祐の祖父、則祐が1352年に築城を始めさせ、父義則の時代も含めて約40年間工事を継続した。本格的な防御施設も施されている。

山頂から西へ斜面を下ると、右手に深い谷が見える。付近に複数ある堀切のうち最大のものだ。大きな岩盤を砕いて掘られ、敵の侵入を防ぐ。

山頂の北側には、赤松時代に造られた横堀や、古代に積まれた石垣など、防御施設が集中している。一帯は勾配が緩やかで、最大の弱点といえる。満祐らを滅ぼした山名持豊（宗全）の軍勢も、そこから攻め込んだとみられる。

盗賊が住み着いた時期も

古代と中世の空白期
退治の記録残る

古代の山城が役目を終え、赤松氏が新たに城を築くまでの空白期間、一帯には山岳寺院が整備されたほか、盗賊が住み着いた時期もあったと伝えられる。

14世紀に成立した播磨の地誌「峯相記」は、天徳年間（957～61年）に盗賊が城を構え、都への貢ぎ物を奪っていたが、退治されたと記す。

江戸時代の地誌「播磨鑑」によると、城山の盗賊の討伐軍が組織され、印南郡的形（現姫路市的形町）で訓練をしたとされる。

また、959（天徳3）年、城山の盗賊が田原文修将軍に退治されたと記されており、捕らえられた盗賊は揖東郡逢野（現同市相野）で都からの使者に引き渡されたとの記述もある。

盗賊がどこに拠点を構えたかなど、詳しいことは不明だが、城山城の長い歴史の中でその存在は異彩を放っている。

寺院跡とされる遺構。大きな礎石が見える

はりま山城新聞

次回25日は「あこう新聞」です。「はりま山城新聞　城山城㊦」は27日に掲載します

とりでの記憶6

城山城 ㊤

たつの市北部にある城山城（きのやまじょう）跡は、嘉吉（かきつ）の乱（1441年）で将軍足利義教（よしのり）を暗殺した赤松満祐（みつすけ）が幕府軍に追い詰められ、自害した歴史の舞台として知られる。また、赤松氏が拠点とした中世の城と、7世紀後半に築かれた古代の城が同じ場所にある貴重な遺構でもある。その特徴や見どころをたつの市教育委員会歴史文化財課専門員の義則（よしのり）敏彦さん(60)の案内で2回に分けて紹介する。初回は中世の城跡を中心に見ていく。

（記事・田中伸明、写真・大山伸一郎）

㊨赤松満祐らを供養したと伝わる三基墓。辺りは薄暗く、独特の雰囲気だ

㊧中世の城山城で最大の堀切。岩盤を砕いて掘られている

山頂北に防御施設集中

赤松氏拠点 中世の城跡巡る

城山城へのルートはさまざまあるが、今回は義則さんの先導で、あまり知られていない道（地図の点線）を登った。一般向けには下野田登山道がお薦めというが、それでも傾斜はきつい。城山城が格好の要害であることが分かる。

目印が少ない道をよじ登り、やっとの思いで尾根道へ。十数分歩くと急に視界が開ける。西播磨県民局が進める「山城復活プロジェクト」の一環で整備された展望台だ。一部の木々が伐採され、眺望が素晴らしい。

一息入れ、尾根道をさらに進むと、立派なスギが増え急に薄暗くなる。周辺には平地が広がり、大きく平らな石が見える。「寺院の跡と考えられています」と義則さんが説明する。1辺が約9㍍と約12・7㍍あるお堂が立っていたという。

「こっちに参道の石段が残っています」。義則さんに促されて、斜面をのぞき込む。たしかに階段部分の石材が見える。幅は1㍍ちょっとだろうか。狭くてかなり急傾斜だ。

寺院は中世城山城が築かれる前から存在し、城郭へ転用されたとみられる。当時の文献によると、本堂など一部は寺の施設として残されたようだ。

さらに歩みを進めると、一層広くて薄暗い場所に出る。石造りの板碑と不動明王、それに水輪が並んで立ち、「三基墓（さんきぼ）」と呼ばれる。この付近で満祐ら一族は自害して果てたという。辺りはしんと静まり返り、独特の雰囲気がある。

隣に広い平地があり、「赤松屋敷跡」と伝わる。隅に岩場があり、水が流れ出していた。井戸跡という。流れの先は視界が開け、麓の街並みが一望できる。

一帯では火災の跡が確認されている。落城時に火が放たれたようだ。周辺からまとまった数の青磁や白磁の破片も見つかっている。茶わんなどの茶道具が多く、当時の最高級品という。

「不思議なことに、すべて粉々の状態でした。人為的に割られた可能性があります」と義則さん。最期を覚悟した満祐らは、愛蔵の器を敵に渡すまいと自ら割ったのだろうか。

中世の城山城は、築城の過程が文献で確認できる希少な遺構だ。満祐の祖父、則祐（そくゆう）が135